

海外研究発表会報告

報告者：池田玲子・トンプソン美恵子・房賢嬉・小浦方理恵

1.	日程	2014年 11月8日(土)～11月9日(日)
2.	地域(概要含む)	台湾 交流協会 B1文化ホール
3.	担当者(人数・役割)	講演：池田玲子(鳥取大学) ワークショップ：池田玲子・トンプソン美恵子(早稲田大学)・房賢嬉(お茶の水女子大学) ポスター発表：池田玲子、小浦方理恵(東京海洋大学)、トンプソン美恵子、原田三千代(三重大学)、房賢嬉、広瀬和佳子(神田外語大学)
4.	形態	講演・ワークショップ・ポスター発表・全体討論
5.	主催	主催：科技部学術研究群「協働学習導入日語教学実践研究会群」 共催：協働実践研究会(日本)
6.	テーマ(タイトル)	協働の理念と実践及び協働学習を取り入れた日本語教育実践交流会
7.	内容の概要	<p>1日目：11月8日(土)</p> <p>◆講演(池田玲子)「グローバル時代の日本語教育の協働学習—理論と実践—」</p> <p>◆ワークショップ(池田玲子・トンプソン美恵子・房賢嬉)</p> <p>1)ピア・ラーニング体験：①会話活動 ②発音学習</p> <p>2)ピア・ラーニング 授業のデザインとその検討会</p> <p>2日目：11月9日(日)</p> <p>◆ポスター発表：台湾のピア・ラーニング実践、日本のピア・ラーニング実践、海外での教師研修参加者の学びの分析 他《協働実践研究会日本支部メンバーによるポスター発表》</p> <p>・近藤彩・品田潤子・池田玲子・藤原未雪・小川恵美子・金孝卿「ケース教材を用いた実践トレーニングプログラムの開発 ビジネスをめぐる多様な視点から—」*池田が発表</p> <p>・トンプソン美恵子・房賢嬉・小浦方理恵・池田玲子「教師が協働学習を取り入れていくために必要なサポートは何か—韓国の日本語教師による期待と不安の分析から—」</p> <p>・原田三千代「Academic writing クラスにおける対話的相互作用の分析—対面・非対面の推敲活動から—」</p> <p>・広瀬和佳子「コミュニティを結ぶ場としての教室：留学生の初年次教育における協働的学びの意義」</p>

		◆ 全体討論
8.	参加者 (人数・背景・声など)	26名 協働実践研究会会員・日本語教育関係者
9.	担当者の内省	<p>2006年に館岡・池田が協働学習（ピア・ラーニング）をテーマに台湾の3つの地域（台北・台中・高雄）において教師研修を行って以来、羅曉勤さん、荒井智子さん（いずれも銘伝大学）工藤節子さん（東海大学）、張瑜珊さん（新生醫護管理專科學校）をはじめ、数名の方々が協働学習について研究をされてきました。その後、協働実践研究会設立の際に台湾支部を設置し、その後も何度か日本との研究交流の機会をもつことができました。今回は、日本から6名のメンバー（池田玲子、小浦方理恵、トンプソン美恵子、原田三千代、房賢嬉、広瀬和佳子）が参加し、講演、ワークショップ、ポスター発表を行いました。</p> <p>初日のワークショップにおいては、各グループとも活発な意見交換が展開され、現実的に自分たちの実践でどのように活用できるかというところまで議論が深まっていた印象です。2日目のポスター発表は、協働実践研究会（台湾）の呼びかけで参加された方々による実践に裏打ちされており、私たち日本側からの参加者にとっても、非常に興味深いものばかりでした。</p> <p>初日のワークショップ、そして2日目のポスター発表を経て、総括としての全体討論では、今後の台湾での協働学習研究に対する具体的な提案が出されました。その一つは、HP上での海外の研究会同志のやり取りが可能になるような方法の検討です。この話題はすでに日本の研究会においても検討中です。日本ではQ&Aページを設け、そこで日本や海外の各地の情報交換が可能になるようにするという構想です。台湾からも同じ要望が出されたことで、この課題を進めやすくなると思います。</p> <p>また、日本語教育だけの協働学習ではなく、他の分野との協働による教育の開発を海外でも試みてはどうかという意見がありました。この意見は、今回、池田がポスター発表をしたうちの一つに、ビジネスの日本語教育をケース学習という方法で実施するものに関連した意見でした。ここでは、実際のビジネス分野の方々との協働を行い、そこで生み出された</p>

		<p>教育プログラムを日本語教育と企業研修の場の双方で採用するという提案です。こうした他分野との協働が海外においても、日本語教育側から発信できるのではないかという議論もここで展開されました。</p> <p>最後に全体討論で大きな話題となったのは、協働学習の実践をどう評価するのか、現在の台湾の教育制度の中で、どう評価を実施していくのかという意見です。実際に大学の授業で協働学習を試みている台湾の教師の一人からの問題提起の後、全体で議論をしました。台湾の実践者からも日本からの参加者からも意見交換がありました。台湾の教育制度や学習者、日本語教育の位置づけについて、日本から参加した私たちにとっては、日本とは違った現状について知ることができました。しかし、この課題は、おそらくこの場ですぐに解決策の見つかるという質のものではなく、今後、実践者同士が多様な教育現場での試みを検討し合い、そこからそれぞれの現場に適したあり方を教師自身が模索していくものではないかと思われました。</p>
10.	次回への課題	<p>中国北京での日本の発表者との交流に続き、台湾でも両地域の実践について情報交換ができたことに大きな意味があったと考えます。こうした情報共有の機会を実際に対面で行うことで、そこに深い議論の場が展開できることだけでなく、その場に起きる実践者同士の関係性がその後の実践を支える基盤となることが期待できるのではないのでしょうか。今後は、できるだけ日本⇔海外だけでなく、海外地域同士の交流が可能となるように、HPの充実、並びに海外研究会開催を促進していきたいと思えます。</p>

会場での様子







